

新たな視点の防犯広がる

手探りの「見守り」活動

① 女児事件半年

「安全や安心の確保が街全体に浸透しています」。習志野市のJR津田沼駅南口一帯の約35分広がる奏の杜地区のエリアマネジメントを行っている一般社団法人「奏の杜パートナーズ」理事長の織戸久雄さん(65)は、そう胸を張った。この地区は、住民や地権者が単なる自治会機能にとどまらず、主体的かつ積極的に防犯などにも参加している。

大半が農地だったこの地区は、準大手ゼネコンのフジタがまちづくりコーディネーターとして、平成15年からの再開発事業の初期段階から参画。「津田沼プロジェクト」と言われ、景観や環境と同様に防犯の概念をまちづくり段階から組み込んできた。「塀やセキユリティーで閉ざすのではなく、『開かれた防犯』がこの街の大きな特徴」と、事業開始時から関わっている同社担当者の鎌谷聡さん(52)はこう説明する。

地区を歩くと、見通しの良い直線道路が多いことや、背丈の低い生け垣ばかりがあることに

まちづくり、体験型安全教育。。

気づかされる。「ブロック塀や高い生け垣があると見えなくなるから、ここでは住民の方にお願している」と織戸さん。新たな入居者には、同法人が街全体の取り組みを説明し、強制力はないがそれに即した配慮が求められるという。

こうした画期的な街づくりは、警察庁が26年3月にとりまとめた「新たな安全・安心まちづくりに関する調査研究会」の

報告書でも取り上げられた。国内はもちろん、海外からも先進的な事例として視察が相次いでおり、子育て世代を中心に住民も増えているという。

一方、子供たち自身への「訓練」の必要性を指摘する声もある。「一昔前に比べて、子供が距離感をつかむのが苦手になっている」。体験型安全教育の概念を提唱し、全国の学校などで講義などを行うNPO法人体験



防犯カメラの配置や低く刈り込まれた生け垣など防犯のためのまちづくりの特徴を説明する奏の杜パートナーズの織戸久雄理事長 〓習志野市(永田岳彦撮影)

型安全教育支援機構の清永奈穂代表(46)はこう話す。

この法人では、犯罪者の行動分析から子供が自ら実践的に身を守る方法を提唱。子供が主体的に考え、犯罪から身を守る活動の普及を目指している。

たとえば、防犯ブザーを付けていてもすぐに鳴らせないとこるに付けていたり、鳴らし方が分からなかったりしたら意味がない。「どういう人が近づいてきたら鳴らしたらいいのかわからない子供は多い」と清永さん。大人の見守りや機器に頼った防犯だけではなく、「子供自身に安全のための基礎体力をつけな」といけな」と強調する。

一方で、レエ・ティ・ニヤット・リンさん(当時9)の事件後、見守り活動などが「熱心なところはより熱心になっていくが、家族に心配されるなどといった辞めるグループの2極化の傾向が強まっている」とも感じているという。子供だけでなく、そうした活動のリーダーとなる大人や団体への支援も重要だと訴える。

まちづくりの初期段階から防犯を意識し、子供自身にも体験的に安全教育を身につけさせる。子供たちを見守る活動の実効性を高めようという新たな取り組みは徐々に広がりをみせている。

この連載は永田岳彦、橋川玲奈、長谷裕太が担当しました。